

600億円を遣った芸術のパトロン・・薩摩治郎八

前坂 俊之〔静岡県立大学国際関係学部教授〕

けた外れの大富豪で、花のパリで恋と芸術に贅沢三昧に生き、あり余るカネをすべて使い尽くした「東洋のロックフェラー」、国際的なプレイボーイとして社交界の寵児となった「東洋の貴公子」とさまざまな異名がつけられた。



通称「バロン・サツマ」と薩摩治郎八(1901－1976)である。

1920年代にパリに渡り、華やかな社交界に君臨し、恋愛と芸術、美のパトロン的存在として、今にすれば約六百億円ものカネを散財し尽くした稀有の男。日本人には例をみない、二〇世紀を代表する国際的プレイボーイであり、芸術のパトロンであった。

薩摩治郎八は明治三十四年(一九〇二)に「明治の綿業王」といわれた大富豪、薩摩治郎兵衛の孫として東京に生まれた。

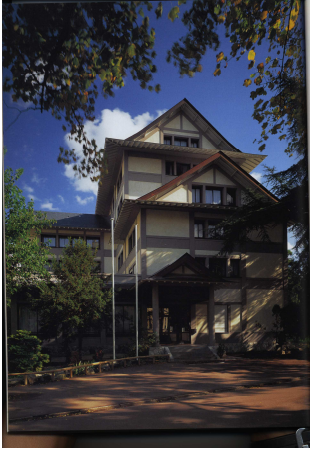
大正八年(一九一九)秋、十九歳の治郎八はロンドンに渡り、オックスフォード大学に学んだ。毎月一万円(今に換算すると約三千万円以上)が仕送りされた。

早速、ダイムラーの自家用車に乗って、英国人のお抱え運転手に市中を悠然と走らせ、ロンドンの一流店や劇場などを豪遊する毎日。すぐに「東洋のロックフェラー」と評判になった。

大学を中退し、芸術の都パリへ渡ると、芸術と恋と冒険に青春を燃焼させる。

〔酒と恋と芸術と〕

当時、パリには「エコール・ド・パリ」(パリ派)の藤田嗣治、ピカソ、モディリアニ、マティス、デュフィらの画家たちが多数集まっていた。治郎八はすぐ藤田と親しくなり、ジャン・コクトー、レーモン・ラディゲ、海老原喜之助、岡鹿之助らを紹介され交際の輪が広がった。



彼はヨーロッパの貴族パトロンのように、芸術家たちに大金をボンと出すが口は出さない。派手な遊びっぷりでパリ社交界を鳴らした。当時、パリ随一の美人女優のエドモンド・ギーと愛人関係になるかと思えば、伯爵夫人、女優、モデルたちと次々にラブフェアールをくりひろげた。

そんな治郎八を見込んで、パリ南郊の大学都市に「日本館」建設計画が持ち込まれたが、ボンと百万円を提供した。

今になおすと数十億円である。

広大な敷地に日本の城のような地上七階・地下一階建ての日本館が建設され、一階の正面には藤田嗣治の壁画が飾られた。

一九二九年（昭和四）五月の開館式にはドゥメルグ大統領ら約一千人社交界の華といわれた千代子夫人が集まり、名門ホテル「リッツ」で治郎八が主催した夜会には、今の金にして数億円をかけた豪華絢爛なパーティーが開かれた。



パリ随一の高級紳士服店「ランバン」の特別仕立ての濃紺タキシードを着こなし、「ポール・ポアレ」の夜会服にダイヤ、エメラルドを無数に散りばめたスタイルの千代子夫人とともに登場、注目を一身に集めた。

以後、夫人はパリ社交界の華となった。

フランス政府からは治郎八にレジオン・ド・ヌール勲章が授与された。治郎八は「バロン」（男爵）と呼ばれ、「『バロン・サツマ』がパリ社交界で流行を作る」とまで言われた。

〔金遣いの達人〕

治郎八夫妻はカンヌでの「自動車エレガンス・コンクール」にさっそうと出場、スウェーデン王室車などと競走して、グランプリを獲得した。「この時のマダム・サツマの純銀製の車は、マリー・アントワネットの儀装馬車以来の素晴らしさだった」という。

夫妻の生活は贅沢を極め、冬場はカンヌの最高級ホテル「マジュスチック」に宿泊、夏はドービルのホテル「ノルマンディー」で暮らす王侯貴族もおよばぬ豪華なもので、一カ月の生活費は一億五千万円にのぼった。

「こんな生活は虚栄だと世間から指弾されるかもしれないが、生活と美を一致させようとした一種の芸術的創造であった」と回想する。

治郎八は一九五一年(昭和二十六)に五十歳で帰国した。

仏滞在は三十年に及び、つぎこんだ金は六百億円以上にのぼる。無一文となって東京浅草の安アパートに住み、病のため再婚した夫人の故郷徳島に移り、昭和五十一年(一九七六)二月、七十五歳で華麗なる生涯を終える。

恋愛と芸術と美に生涯をささげた治郎八は、金使いの一番うまい日本人であった。